

—探求・川にちなんだ万葉集の歌—

# 万葉の川心 第23回

川崎市立木月小学校教諭 船田 園子

防人の歌（巻第二十 四三三三番歌）

時時の花は咲けども何すれそ

母とふ花の咲き出来ずけむ

右の一首は、防人山名郡の丈部眞磨のなり。

「これ、もっていけよ。」

偶然会った知人に、缶ビールを手渡された。ちよつと困った顔で、仕事だからといいかけたが、旅にはつきものだけという相手の言葉に消されて、受け取った。「それじゃあ、またな。」

東京駅。「こだま」がホームに横たわっている。出発五分前、禁煙車両を確認して、列車に乗り込む。空席の多さから、平日の午前中という時間帯をあらためて感じ、少しばかりの優越感に浸る。出張という名の仕事だから、この旅に何があるわけでもない。何の期待もないのだが。二人がけの席をひとりじめして腰を下ろし、窓枠に切り取られた日常の景色を振り返る。

旅、か。仕事とか、出張などと言わずに、旅のはじまりと違ってみようか。いつもの自分から、いつもの時間の流れからちよつと飛び出して、別の時間を生きてみる。それもいい。プルトップを引き、媚薬を喉に流し込む。発車のベルが容赦なく鳴り響き、扉が日常をきつちりと締め出す。それぞれの人生を乗せ、「こだま」は今、静かに動き出した。

今でこそ、旅が気軽にできるようになった。国内はもちろん、海外、そして、世界の秘境にまでツアーが出るようになった。二十一世紀には宇宙の旅も企画されるだろう。人間の探求心や好奇心は、尽きることがない。多少の危険は伴うが命を落とすほどではないとみんながどこかで信じている。そして、旅はその大

小・長短に関わらず、見えない大きな贈り物を人々に与えてくれることは、誰もが納得するところである。

同じ旅といっても、命をかけた旅もある。この巻第二十は、大伴家持、大原今城、中臣清麿などの作者の他、東国防人の歌が集められている。東国から徴発され、何日も何日もかけて北九州の守備についた防人達。もちろん、生きて帰れる保障はない。幸いに帰り着いたとしても、それまでに、年老いた父母が生きているかどうか分からない。妻や子が息災でいるかどうか分からない。過酷な状況のなか、歌が詠まれた。本当につらいとき、苦しいとき、心の支えはやはり家族なのか。その歌は、親子・夫婦の絆を直截に詠んだものが多い。

「四季折々の花は咲くのに、どうして「母」という花は咲き出さなかったのだろうか。」（四三三三番歌）

「妻は、私をひどく恋慕しているらしい。飲む水に影まで見えて、どうにも忘れられない。」（四三三三番歌）

「父も母もせて花であってほしい。草を枕の旅に出ようと、もしも花なら、大切に捧げ持って行きたい。」（四三三五番歌）

これらの歌を心の支えにし、皆で歌い、励まし合って防人の任を果たしたことであろう。写真の碑は、静岡県袋井市立袋井中学校の敷地内にある。四三三四番歌に「山名郡川相」という名が出てくるが、この地は、遺跡から万葉の昔より原野谷川と字刈川が合流していたと推察されている。川相の語源から、歌はこの地を詠んだものと考えられ、明治三十六年小学校入学者の古稀記念として、この碑が建てられたという。美しく明るく心を和ませてくれる花は、四季がめぐるたびに咲くというのに、母という名の花はなかった。咲いていたならそれを胸に旅立てたのに。兵士にとって母の優しさ美しさが花と重なり、その花に会いたい、抱きしめたい想いが、この歌からあふれてやまない。命にかえても守りたいものは、愛しいもの命ではないだろうか。引き離されても消えない絆を、人は皆信じている。万葉の昔から、平成の今もずっと、ずっと。

旅を楽しいと思うのは、帰る場所があるからだというのは、誰の言葉であったろうか。

